

問題 1（検診）

腹部超音波マニュアルの実施基準について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a 任意型検診には、がん検診としての有効性が確立していない検査方法を含む場合がある。
- b 対策型検診の代表例は人間ドックである。
- c 死亡率とは特定の集団の中で、一定期間に死亡した人の割合である。
- d 対策型検診では対象集団全体の死亡率の低下をめざす。
- e 任意型検診では対象集団の死亡率の低下をめざす。

問題 1（検診）の解答、解説

解答 b、e

腹部超音波マニュアルの実施基準について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a（正） 任意型検診には、がん検診としての有効性が確立していない検査方法を含む場合がある。

任意型は検査方法の選択が自由で、有効性が確立していないものも含まれることがある。

- b（誤） 対策型検診の代表例は人間ドックである。

人間ドックは任意型検診の代表例であり、対策型ではない。

- c（正） 死亡率とは特定の集団の中で、一定期間に死亡した人の割合である。

定義として正しい。死亡率はその集団における死亡の頻度を示す指標。

- d（正） 対策型検診では対象集団全体の死亡率の低下をめざす。

対策型検診の目的は、集団全体の死亡率を下げることにある。

- e（誤） 任意型検診では対象集団の死亡率の低下をめざす。

任意型検診は個人の選択によるもので、集団の死亡率低下を目的とはしていない。

任意型検診では対象者（個人）の死亡率の低下をめざす。

問題 2 (検診)

2023 年度の癌の統計について正しいのはどれか。2 つ選べ。

- a 女性の死亡率第 1 位は乳がんである。
- b 男性の死亡率第 1 位は肺がんである。
- c 膵臓がんの死亡率は、年々増加傾向にある。
- d 肝臓がんの死亡率の推移をみると、横ばい状態である。
- e 子宮頸がんの罹患率は年々減少している。

問題 2（検診）の解答、解説

解答 b、c

2023 年度の癌の統計について正しいのはどれか。2 つ選べ。

- a（誤） 女性の死亡率第 1 位は乳がんである。
2023 年の女性のがん死亡数で最も多いのは大腸がん、乳がんは 4 位。
- b（正） 男性の死亡率第 1 位は肺がんである。
2023 年の統計では、男性のがん死亡数で最も多いのは肺がん。
- c（正） 膵臓がんの死亡率は、年々増加傾向にある。
膵臓がんは罹患数・死亡率ともに増加傾向にあると報告されている。
- d（誤） 肝臓がんの死亡率の推移をみると、横ばい状態である。
肝臓がんの死亡率は減少傾向である。
- e（誤） 子宮頸がんの罹患率は年々減少している。
子宮頸がんの罹患率は統計的には微増傾向にある。
HPV（ヒトパピローマウイルス）感染：若年層では感染機会が増える傾向がある。
HPV ワクチン接種率の遅れ：定期接種化されたのは最近で、接種率もまだ十分とは言えない。

問題 3（検診）

癌の統計について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a 大腸がん死亡の年次推移をみると、年々増加している。
- b 膵臓がんは、罹患率・死亡率ともに年々増加している。
- c 最新の死亡統計では、女性の死亡率第1位は大腸がんである。
- d 最新の死亡統計では、男性の死亡率第1位は胃がんである。
- e 胆嚢・胆管がん死亡の年次推移をみると、年々減少している。

問題 3（検診）の解答、解説

解答 a、d

癌の統計について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a（誤） 大腸がん死亡の年次推移をみると、年々増加している。
大腸がんの死亡数は高水準で推移しているが、年々増加しているとは言えない。
近年は横ばい～微減傾向も見られる。
- b（正） 膵臓がんは、罹患率・死亡率ともに年々増加している。
膵臓がんは罹患率・死亡率ともに増加傾向にあると報告されている。
- c（正） 最新の死亡統計では、女性の死亡率第1位は大腸がんである。
2023年の統計では、女性のがん死亡数で最も多いのは大腸がんである。
- d（誤） 最新の死亡統計では、男性の死亡率第1位は胃がんである。
男性の死亡率第1位は肺がんであり、胃がんは第3位。
- e（正） 胆嚢・胆管がん死亡の年次推移をみると、年々減少している。
胆嚢・胆管がんは減少傾向にあるとされている。

問題 4（検診）

癌検診の精度についての説明で誤っているのはどれか。

- a 感度（sensitivity）とは、癌のある者を「陽性」と正しく判定する割合である。
- b 特異度（specificity）とは、癌のない者を「陰性」と正しく判定する割合である。
- c 特異度（specificity）は見落とし（偽陰性）の少なさを表す指標である。
- d 偽陰性（false negative:FN）とは、癌があるにもかかわらず、検査で「陰性」と判定されるものをいう。
- e 偽陽性（false positive:FP）とは、癌がないにもかかわらず、検査で「陽性」と判定されるものをいう。

問題 4（検診）の解答、解説

解答 c

癌検診の精度についての説明で誤っているのはどれか。

- a（正） 感度（sensitivity）とは、癌のある者を「陽性」と正しく判定する割合である。
感度は真陽性率とも言える。
- b（正） 特異度（specificity）とは、癌のない者を「陰性」と正しく判定する割合である。
特異度は真陰性率を示す。
- c（誤） 特異度（specificity）は見落とし（偽陰性）の少なさを表す指標である。
偽陰性の少なさを表すのは感度（sensitivity）であり、特異度は偽陽性の少なさを示す指標。
- d（正） 偽陰性（false negative:FN）とは、癌があるにもかかわらず、検査で「陰性」と判定されるものをいう。
定義として正確。見落としの代表例。
- e（正） 偽陽性（false positive:FP）とは、癌がないにもかかわらず、検査で「陽性」と判定されるものをいう。
過剰診断や不安の原因になることもある。

問題 5（検診）

表は超音波がん検診の真陽性、真陰性、偽陽性、偽陰性の関係を示している。超音波がん検診の指標の説明で、誤っているのはどれか。

- a 感度 = $\frac{\text{真陽性}}{\text{真陽性} + \text{偽陰性}} \times 100 (\%)$
- b 特異度 = $\frac{\text{偽陰性}}{\text{偽陽性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$
- c 陽性反応的中度 = $\frac{\text{真陽性性}}{\text{真陽性} + \text{偽陽性}} \times 100 (\%)$
- d 陰性反応的中度 = $\frac{\text{真陰性}}{\text{偽陰性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$
- e 有病率 = $\frac{\text{真陽性} + \text{偽陰性}}{\text{真陽性} + \text{偽陰性} + \text{偽陽性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$

表

	がんあり	がんなし
超音波がん検診陽性	真陽性	偽陽性
超音波がん検診陰性	偽陰性	真陰性

問題 5（検診）の解答、解説

解答 b

表は超音波がん検診の真陽性、真陰性、偽陽性、偽陰性の関係を示している。超音波がん検診の指標の説明で、誤っているのはどれか。

a（正） 感度 = $\frac{\text{真陽性}}{\text{真陽性} + \text{偽陰性}} \times 100 (\%)$

b（誤） 特異度 = $\frac{\text{偽陰性}}{\text{偽陽性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$

特異度 = $\frac{\text{真陰性}}{\text{偽陽性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$

c（正） 陽性反応的中等度 = $\frac{\text{真陽性性}}{\text{真陽性} + \text{偽陽性}} \times 100 (\%)$

d（正） 陰性反応的中度 = $\frac{\text{真陰性}}{\text{偽陰性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$

e（正） 有病率 = $\frac{\text{真陽性} + \text{偽陰性}}{\text{真陽性} + \text{偽陰性} + \text{偽陽性} + \text{真陰性}} \times 100 (\%)$

表

	がんあり	がんなし
超音波がん検診陽性	真陽性	偽陽性
超音波がん検診陰性	偽陰性	真陰性

問題 6（検診）

厚生労働省の指針で定める市町村のがん検診について誤っているのはどれか。

- a 胃がん検診一問診、胃部エックス線検査—50 歳以上—2 年に 1 回
- b 子宮頸がん検診一問診、視診、子宮頸部細胞診および内診—20 歳以上—2 年に 1 回
- c 肺がん検診一問診、胸部エックス線検査および喀痰細胞診—40 歳以上—1 年に 1 回
- d 乳癌検診一問診、視診、触診及び乳腺超音波検査—40 歳以上—2 年に 1 回
- e 大腸がん検診一問診 便潜血検査—40 歳以上—1 年に 1 回

問題 6（検診）の解答、解説

解答 d

厚生労働省の指針で定める市町村のがん検診について誤っているのはどれか。

- a（正） 胃がん検診—問診、胃部エックス線検査—50 歳以上—2 年に 1 回
- b（正） 子宮頸がん検診—問診、視診、子宮頸部細胞診および内診—20 歳以上—2 年に 1 回
- c（正） 肺がん検診—問診、胸部エックス線検査および喀痰細胞診—40 歳以上—1 年に 1 回
- d（誤） 乳癌検診—問診、視診、触診及び乳腺超音波検査—40 歳以上—2 年に 1 回
乳癌検診—問診、視診、触診及び乳房エックス線検査—40 歳以上—2 年に 1 回
厚生労働省の指針では、乳がん検診は問診とマンモグラフィが推奨されており、
乳腺超音波検査は含まれていない。視診・触診も現在は推奨されていない。
- e（正） 大腸がん検診—問診 便潜血検査—40 歳以上—1 年に 1 回

問題 7 (検診)

精密検査を必要とする所見として適切なのはどれか。 2つ選べ。

- a 肝内石灰化
- b 胆道気腫
- c 胆嚢描出不良
- d 膵描出不良
- e 脾石灰化

問題 7（検診）の解答、解説

解答 c、d

精密検査を必要とする所見として適切なのはどれか。2つ選べ。

a（誤） 肝内石灰化

肝内石灰化は判定区分 C、肝内結石との鑑別が問題とならなければ経過観察とする。

b（誤） 胆道気腫

胆道気腫は判定区分 C、経過観察とする。

c（正） 胆嚢描出不良

胆嚢描出不良は判定区分 D2、胆嚢が描出されない場合は胆嚢癌で内腔が占められていることがあり、精密検査が必要である。

d（正） 膵描出不良

膵描出不良は判定区分 D2、精密検査が必要である。

e（誤） 脾石灰化

脾石灰化は判定区分 B 脾石灰化は軽度異常とし経過観察は不要である。

問題 8 (検診)

2023 年の統計において、がん死亡率が増加傾向にあるのはどれか。2つ選べ。

- a 胃がん
- b 子宮がん
- c 膵がん
- d 肝臓がん
- e 大腸癌

問題 8（検診）の解答、解説

解答 b、c

2021 年の統計において、がん死亡率が増加傾向にあるのはどれか。2つ選べ。

a（誤） 胃がん

死亡率、罹患率とも減少傾向。

b（正） 子宮がん

特に子宮頸がんにおいて、若年層での罹患率・死亡率が緩やかに増加傾向にあると報告されている。

c（正） 膵がん

膵臓がんは罹患率・死亡率ともに年々増加しており、早期発見が難しいことも影響している。

d（誤） 肝臓がん

死亡率、罹患率とも減少傾向。

e（誤） 大腸癌

死亡数は高水準だが、横ばい～微減傾向であり、「増加傾向」とは言えない。

問題 9（検診）

誤っているのはどれか。

- a がん検診の有効性は、対象となるがんの死亡率が減少することを指標として評価する。
- b きわめて早期にがんを発見したり、生命を脅かさないがんを発見することを過剰診断という。
- c 「特異度が高い」とは、陽性のものを正しく陽性と判定する可能性が高いことをさす。
- d 対策型検診の対象は無症状の者であり、診療の対象となる者は該当しない。
- e 任意型検診には、がん検診としての有効性が確立していない検査方法を含む場合がある。

問題 9（検診）の解答、解説

解答 c

誤っているのはどれか。

- a（正） がん検診の有効性は、対象となるがんの死亡率が減少することを指標として評価する。
がん検診の目的は死亡率の低下であり、有効性評価の中心となる。
- b（正） きわめて早期にがんを発見したり、生命を脅かさないがんを発見することを過剰診断という。
過剰診断は、検診の副作用として重要な概念。
- c（誤） 「特異度が高い」とは、陽性のものを正しく陽性と判定する可能性が高いことをさす。
「特異度が高い」とは、陰性のものを正しく陰性と判定する可能性が高いことをさす。
- d（正） 対策型検診の対象は無症状の者であり、診療の対象となる者は該当しない。
対策型検診は公的に実施される無症状者向けの検診で、診療対象者は含まれない。
- e（正） 任意型検診には、がん検診としての有効性が確立していない検査方法を含む場合がある。
任意型は個人の選択による検査で、有効性が未確立な方法も含まれることがある。

問題 10（検診）

腹部超音波マニュアルの実施基準について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a 対象臓器は、肝臓、胆道、膵臓、腎臓、脾臓、大動脈とする。
- b 各検者で記録すべき断面を定め、一定の基準で行う。
- c カテゴリー2以上の病変は最大径と部位を記載する。
- d 異常がなくても毎年検診を勧める。
- e 検査予定が午後の場合は検査前4時間、固形物、乳製品を摂取しない。

問題 10（検診）の解答、解説

解答 b、e

腹部超音波マニュアルの実施基準について誤っているのはどれか。2つ選べ。

- a（正） 対象臓器は、肝臓、胆道、膵臓、腎臓、脾臓、大動脈とする。
- b（誤） 各検者で記録すべき断面を定め、一定の基準で行う。
各施設で記録すべき断面を定め、一定の基準で行う。
- c（正） カテゴリー2以上の病変は最大径と部位を記載する。
- d（正） 異常がなくても毎年検診を勧める。
- e（誤） 検査予定が午後の場合は検査前4時間、固形物、乳製品を摂取しない。
検査予定が午後の場合は検査前6時間、固形物、乳製品を摂取しない。

問題 11（検診）の解答、解説

初回超音波検査で次の所見を認めた。経過観察可能なのはどれか。2つ選べ。

- a 9mm の肝高エコー腫瘤、背景肝は慢性肝障害パターン。
- b 4mm の表面不整、内部不均一、壁に接する胆嚢ポリープ。
- c 9mm の後方エコーの増強を認める肝腫瘤。
- d 7mm の腓低エコー腫瘤、上流側の主膵管拡張なし。
- e 16mm の肝低エコー腫瘤、マージナルストロングエコーを伴う、背景肝は正常。

問題 11（検診）の解答、解説

解答 b、e

初回超音波検査で次の所見を認めた。経過観察可能なのはどれか。 **2つ選べ**。

- a（誤） 9mm の肝高エコー腫瘤、背景肝は慢性肝障害パターン。
慢性肝障害のある肝充実性病変はカテゴリー 4、D2 で要精検。
- b（正） 4mm の表面不整、内部不均一、壁に接する胆嚢ポリープ。
最大径<5mm の胆嚢ポリープはカテゴリー 2、B で軽度異常。
- c（誤） 9mm の後方エコーの増強を認める肝腫瘤。
肝腫瘍性病変で後方エコーの増強を認めるものはカテゴリー 4、D 2 で要精検。
- d（誤） 7mm の脾低エコー腫瘤、上流側の主脾管拡張なし。
脾臓の充実性病変で低エコー腫瘤はカテゴリー 4、D2 で要精検。
- e（正） 16mm の肝低エコー腫瘤、マージナルストロングエコーを伴う、背景肝は正常。
マージナルストロングエコーを伴う肝腫瘍性病変はカテゴリー 2、C で要再検。

解説

カテゴリー	判定区分
カテゴリー 0：描出不能	A：異常なし
カテゴリー 1：異常なし	B：軽度異常
カテゴリー 2：良性	C：要再検（3・6・12 か月）・生活改善
カテゴリー 3：良悪性の判定困難	D 1：要治療
カテゴリー 4：悪性疑い	D 2：要精検
カテゴリー 5：悪性	E：治療中

判定区分 B、C は経過観察可能である。

問題 12（検診）

初回超音波検査で次の所見を認めた。要精査検査はどれか。2つ選べ。

- a 肝外胆管内のデブリエコー。
- b 胆嚢内結石像。
- c 最大径 10mm の脾高エコー腫瘤。
- d 腎充実性病変。
- e 10mm の腎実質内石灰化像。

問題 12（検診）の解答、解説

解答 a、d

初回超音波検査で次の所見を認めた。要精査検査はどれか。2つ選べ。

- a（正） 肝外胆管内のデブリエコー。
肝外胆管内のデブリエコーはカテゴリー 3、D2 で要精査検査。
- b（誤） 胆嚢内結石像。
胆嚢内結石像はカテゴリー 2、C で要再検査（経過観察）。
- c（誤） 最大径 10mm の腓高エコー腫瘤。
最大径 10mm の腓高エコー腫瘤はカテゴリー2、C で要再検査（経過観察）。
最大径 15mm≦ の腓高エコー腫瘤はカテゴリー3、D2 で要精検。
- d（正） 腎充実性病変。
腎充実性病変はカテゴリー 3、D2 で要精査検査。
- e（誤） 10mm の腎実質内石灰化像。
腎実質内石灰化像はカテゴリー 2、B で要再検査（経過観察）。

解説

カテゴリー	判定区分
カテゴリー 0：描出不能	A：異常なし
カテゴリー 1：異常なし	B：軽度異常
カテゴリー 2：良性	C：要再検（3・6・12 か月）・生活改善
カテゴリー 3：良悪性の判定困難	D 1：要治療
カテゴリー 4：悪性疑い	D 2：要精検
カテゴリー 5：悪性	E：治療中

D2 は要精検（要精査検査）である。

これ以降を閲覧するには
お申し込みください